学校だより

桜水だより

須賀川市立第一小学校

２７年度　第　２７号
№１６０

平成２７年１０月１６日

☎７５－２８５１

県PTA研究大会二本松大会　その３

第一分科会

講師は、水俣病資料館の「語り部」 杉本　肇 様でした。水俣市の漁師の家に生まれ、ご両親、ご祖父母様とも水俣病でなくなられたそうです。

水俣病発生から59年。発生時は、静かで穏やかな漁村であった。国策で誘致されたチッソ工場が60年前、水銀を流し始めた。

ある時から、海鳥が空から降り始めた。猫が全滅した。家畜が死に始めた。「誰かが、毒をまいているのではないか」と疑い始めた。

老人が歩けなくなった。けいれんを起こす人が出てきた。「伝染病ではないか」と差別が始まった。発症すると、バスやタクシーに乗ることを拒まれた。海岸付近に住む人々への差別が始まった。人権すら、なくなっていった。発症当時は「病気」であった。

昭和４３年に原因がやっとわかった。チッソ工場が水銀を流し、水銀をプランクトンが取り込み、それを魚が食べ、人が魚を食べることによって体内に取り込む。水銀中毒であった。当時の水俣は税収の６割をチッソ関連企業から得ていた。多く人がチッソ関連で働いていた。裁判を起こそうとしても、圧力がかけられた。水俣病への差別の不安があった。

次々と私の家族の水俣病が悪化していった。小学生だったとき、救急車のサイレンを聞くと私の家族が運ばれたのではないかと、不安であった。しかし、家族が水俣病であることを隠し続けなければならなかった。差別はずっと続いていたのである。

ある時、祖母が台所から私を呼んだ。「包丁が見つからなくなった」との声。包丁は、祖母の足に刺さっていた。手足の感覚と視力を失っていたのである。今も忘れることのできない光景である。

ある日、両親が同時に入院した。５人兄弟だけが残された。長男であった私への負担は思い出すだけでも辛いものだった。誰にも言えず、弟たちの世話をしなければならなかった。夏休みにボランティアの大学生が支援に来てくれた。これほどの幸せはなかった。今でもその方々と交流させてもらっている。

水俣病の障害者として認定された後、なくなった両親は漁業をやめ、みかん栽培を始めた。無農薬のみかんである。「私たちが農薬での加害者になってはいけない」との思いからである。水俣市では無農薬農業が大きく広がっている。ゴミは22種類に分別して収集している。

過去の環境破壊に学び、環境の町を。差別の町から差別のない町を目指している。

何があったかを学び、発信し、それを克服する努力。それが求められている。

水俣病で一番辛かったのは、差別であった。そして、一番の支えとなったのは、ボランティアの人々であった。

私たち水俣市は、これからも福島を支えていきたい。